

九十九里郷土研究会 郷土研通信

第 8 号
 会長 内山いつ
 事務局 長 村松英一
 事務所 九十九里町 荒生 1416の5
 電話 0475 76-0081
 会員数 55名
 平成30年 5月10日 現在
 設立 平成22年 4月17日

特別講演会の開催と 町誌資料集二十五集の編集

会長 内山 いつ

去る四月二十一日に平成三十年度の定期総会が開催され、本年度の「事業計画」が承認されました(左記)。この事業の中で、本会としては初めての「特別講演会」を開くことにしました。この講演会は、今から七十年前に真亀の地に、突如、「米軍豊海高射砲演習

場」(キャンプ片貝)が建設され、以後十年間、ほぼ毎日、百二十ミリ高射砲、九十ミリ砲を海上に放つ演習が行われました。「発射音が轟き渡り、障子戸がびりびり震動し、家鳴りがし、地震のように揺れ動いた家もあった。トタン屋根の釘がゆるみ、屋根瓦がずれ、壁の間には隙間が出来る始末であった」という記録があります。この米軍基地の設置による諸問題を、この基地について研究されている古山豊氏(元県立東金高校校長、現大網白里市郷土研究会会長)をお招きし、ご講演をお願いすることにしました。町内外の多くの方々のご出席をお願い致します。他方、十年以上、不明になつていた『九十九里町誌資料集二十五集』(最終巻)の原稿を見つけ出しました。これは木島先生が膨大な「漁業帳簿」の古文書を解説・整理・執筆したもので、これをもとに木島・川島・齋藤の各先生方に再検討して頂き、町の力をお借りして出版に漕ぎ着けたいと考えています。

平成30年度 事業計画

月 日	曜	事 業 内 容
4月21日	土	総会 記念講演 木島里八氏
5月19日	土	会員発表 内山いつ氏 村松英一氏
6月16日	土	講話 齋藤功氏 九十九里町のいろいろな書
7月21日	土	特別講演会 古山豊氏 キャンプ片貝の諸問題<仮>
8月18日	土	休会/役員会
9月15日	土	史跡散策 銚子・旭方面
10月20日	土	町内散策 案内村松英一氏 思い出の街角 西之下区
11月3~5日		町文化祭 出展
11月17日	土	会員発表 染谷佳子氏 内山 隆氏
12月15日	土	古文書講座 川島秀臣氏
1月19日	土	新年会 親睦交流会
2月16日	土	講話 本保弘文氏 房総の古街道(こかいどう)
3月16日	土	休会/役員会

本年度も、この新たな二つの事業を取り組みながら、会員の皆様と共に「研修の成果を郷土に還元し、郷土がより元気になるよう貢献」して行きたいと思致します。今後ともご支援・ご鞭撻をお願致します。

かって九十九里にも 米軍基地があった!

特別講演会 (入場無料)

なぜ米軍豊海高射砲演習場が豊海に設置されたか

平成30年7月21日 (土) 13時30分~

講 師 古 山 豊 氏

元県立東金高等学校長 現大網白里市郷土研究会長

会 場 九十九里町中央公民館

主 催 / 九十九里郷土研究会 後 援 / 九十九里町 九十九里町教育委員会

中西月華遺逸 (2)

多趣味の文化人、中西月華

齊藤 功

塗板（黒板か、引用者注）がふいてないと怒ったものだ。然し講義はよくわかった。一度先生に連れられて麴町の陸軍病院材料部の見学をした。独逸語の教師は近藤と云ふ、背の高い先生で、ヘステル読本の一から始めた。数学は校長先生の弟藤田薫平先生。分析は杉山助教師であった。その他、物理・植物・調剤学と、夫々の先生が居た。

教科書は、下山氏の化学、飯盛氏の物理学、柴田氏の植物、勝山氏の調剤学等で、馬喰町の島村利助、本郷の南江堂、日本橋の丸善より外になかった。

この時の学友には、大口喜六、大竹小平衛、成島治平、浅沼藤吉、浪川五郎、歌橋又三郎、植木雄蔵、森田彦四郎、関惣吉、河野、竹本等々、凡そ百五十〜六十人と思ふ。浪川は伊勢町の医者の家から通つて、一番成績が良かった。植木は学校へ来ると云つて図書館へ通つて勉強したさうだ（後略）

この薬学校時代、終世の親友となる東京美術学校生の川崎



九十九里町誌資料集第二十五輯

発行 九十九里町教育委員会

委員 木島 里八 (名誉顧問)

川島 秀臣 (顧問)
齋藤 功 (副会長)

九十九里浜と文化人 (2) 徳富蘆花

戸村直文

中西月華と蘆花との交流は、東金の八鶴館で開かれた講演会を聞きに行つて親睦を深め、月華は自身の別荘「末莉舎」に招き、逗留した。その様子を「蘆花日記」の中に、「九十九里」と題して項目があり、その中に興味深い記述がありました。

その一つは、粟生の月華の別荘「末莉舎」から海岸に出て、物思いに浸りながら、真亀に向かつて歩いていたら、何時の間にか白里に来てしまった。付近の漁師に聞いたら、「ここは今泉だ」と聞かされ、どのようにして真亀川を渡つたのか、記憶がない。引き返してみると、河口を塞いでいた。蘆花はその現象を「袋川」と呼んでいます。

夏になると、農家は、上流の堰を止めるため、下流の水量が少なくなり、引き汐と相まり、砂が堆積して河口を塞いでしまう。やがて、雨がたくさん降り、水量を増すと、流れる所を探すために蛇行するのである。この現象は、九十九里平野の成形成程に似ている。現在の汀線は、漁港の防波堤のためか、自然の汀線の後退が解らないが、粟生から不動堂にかけて砂浜が狭くなっている。八日市場の堀川海岸は、急に深くなり、海水浴場が閉鎖し安（後に原安民）と下宿を共にした。

余談ですが、引用した『薬業の友』は、今から二十五年前、日本医科大学図書館司書細井昌文氏に複写をしていただいたものです。また、参考にした『東京薬科大学九十年』（昭和四十五年）は、二十六年前、当時の日本医科大学付属病院第一外科教室の吉葉昌彦先生から贈られました。

お二人は、中西三郎先生の親友佐久間洋行先生（峻齋、大正五年11916〜平成元年11989）の縁を以て、お目に掛かりました。次回は、このお二人について、少しお話しをいたします。（続く）

伊能忠敬女孀 盛右衛門景明の墓石が千葉市に



文化七年四月十三日に五十五歳で亡くなった伊能（稻生）盛右衛門景明の墓石が以前、九十九里町の北増墓地にあつたが、その後、千葉市中央区弁天の本敬寺内にある稲生家墓所に移された。景明は投機に手を失って失敗し忠敬から勘当され、故郷片貝に帰り、稲生三郎治富家と改め、「加納屋（叶屋）」を営んだ。

さらに、蘆花の「日記」には、「ミヨ」のことや「ながらみ掻き」のことなど、漁師の生活をきめ細かく記述している。特に、地曳網に関しては、思わず笑ってしまう。記述には、女衆が網を黙々と曳いている。網が近付いて来ると、腰巻きを播くし揚げて、急に忙しくなると、腰巻きを播くし揚げてくると、七軒町の七曲がり・・・と、一人の女の金切り声で音頭をとると、ハア、ヤッサ、ヤッサ、ヤッサと、女衆が応じる調子が面白く、間、間に「何とか、何とかヤイ」と一斉に囃すときの面白さ、よくよく聞けば、驚愕するような文句が飛び出す。「でつかいのが所望だよ」と、女衆が笑いながら唄っている。こう露骨に出られたら、ただ笑うしかない。

魚頭を藁でくくつた無禪で、赤銅色の漁師、乳房丸見え、腰巻きを播くし揚げた女衆が一緒に働いている姿は、何も七やかましい定規も無いと記しています。

「侍たちの警視庁」を読んで

染谷佳子

大河ドラマ「西郷どん」を観ながら、幕末から維新期にかけての激動の時代をあれこれ思いめぐらす。多くの犠牲者を出した維新後の混乱の時、新政府は、力をもてあましていた、かつての侍たちを集め、警視庁を作ったという。日本全国から身分も、思想も違う侍たちが集う。戊辰戦争の勝者もいれば、敗者もいる。数年前まで戦いを繰り返していた侍たちが警視庁に集い、ラシャの制服に身を包んだ。大警視に任じられた川路利良は明治五年であり、亡くなったのは明治十二年までの警保寮、警視庁には、百十七名が居る。その事績や墓、史跡などを紹介した本が「侍たちの警視庁」である。

その中には、「からす組隊長」、「新撰組副長助勤」、「白虎隊士」、「井伊直弼を切った男」、「大久保利通を斬った男」、「千葉さなの後継者」、「沖田総司の甥」、「古今亭志ん生の父」、「首切り浅右門の弟」、「十一代目服部半蔵」、「夏目漱石の父」、「柴五郎の兄」、「山本五十六の兄」等々。彼らは、生まれたての警視庁に在籍していた。旧会津藩士もいれば、薩摩藩士もいる。かつての殿様もいれば、足軽もいる。

読んでいて私は驚くばかりであった。幕末の歴史は、今百五十年という事で、テレビ、特にBSテレビではよく取り上げられているが、警視庁が、どのように出来たのかは語られた事がないし、歴史家も識らない。

明治四年に福沢諭吉が、東京府の依頼を受け、英・米・仏の警察制度を学んで論文にまとめている。実際に制度確立に動いたのは、西郷隆盛と従道の兄弟であった。

職を失った士族の新たな職に最適と考えたのだ。やがて刻は流れ、明治十年の西南戦争では、西郷は警視庁の警察を中心の兵隊に、打ち倒されてしまう。皮肉な事である。この戦争に参加した九十九里町作田の作田友吉という方の墓碑が作田の忠魂碑の傍らに残っている。

おっべしⅡ浜のかあちゃんも強かった！

村松英一

夜明けの前の海は冷たい。でも、殆ど裸同然の姿で、男衆やお女ご衆たちは、大きな船を荒波に向かって押し出すのである。荒波と必死に闘い、何度も足をさらわれながら、人間と海とが戦いながら……

船を押し出した後は、緊張から解き放された喜びの笑みが蘇る。こんな壮絶な様子が五十年前にあったとは！

昭和四十四年に片貝漁港が完成して以来、浜の様子は大きく様変わりし、遠い昔の語り草になつてしまった。浜はのどかで、広い砂浜



小関与四郎写真集より

る。私の父も、祖父も警察官であった故、明治の祖父は、維新期後の警察で、どんな働きをしたかは全くわからないが、紋付き着物で、かくしやくとしていた姿は聞き及んでいる。

「東京都警察」を「警視庁」と称しているのは、警視庁自体が「地方公共団体としての東京都」を管轄する警察本部であるのみならず、「日本の首都としての東京」を警備する警察機関、すなわち「首都警察」として次の役割を担っているためである。

- ・ 天皇、皇族の警護
- ・ 国会周辺、行政機関、総理大臣官庁等の警備
- ・ 内閣総理大臣、国務大臣等要人の警護

には網主の勢力を誇示するように、漁船が並び、砂も光り輝いていた。

浜では、日焼けや潮焼けで、赤銅肌になった船方は、荒々しく仲間同志や知人にも怒鳴り浴びせるのだ。また、海に入る時には素っ裸で、前の大事な部分をつまみ、「ミゴワラ」で縛った格好で作業する。おっべしの女たちは、船方の女房や娘がほとんどで、出漁の手助けをするのである。

鯛漁は冬場が最盛期で、海水は身を切るほど冷たく、頭から大波を食らい、もんどり打って波に吞まれる。それにひるまず、一生懸命、漁の手助けをし、浜の生活を支える。荒波に足をすくわれ、翻弄されながら、必死で耐える女たち。焚き火で暖を取りながら、冷え切った体を温め、出漁時の辛さを仲間同志で語り合い、ホッとする一時に慰される。

九十九里浜の男と女、海と渡り合う生活、元氣な九十九里の船方とおっべしが、五十年前にあったとは……。現在の海と漁民の変わり様は、到底考えられない今日この頃である。

*小関与四郎写真集を見て、記憶が蘇る。

△出漁風景▽

昭和十年頃。漁船に動力がつき、船も網もひと廻り大きくなった。出漁時に総がかりで船を押し出すことを「オッベシ」という。砂浜から海へ走り出すには、大変な労力が必要である。焼玉エンジンを備えて船の運行を計ることを始めたのは大正四年（1915）、豊海村の小栗山喜治郎が最初である。以後、動力船が爆発的に増えていく。

△帰港▽

船が帰港すると、ワイヤを下げ、"なげえづら"も降ろした。盤を降ろすため、船を砂浜に揚げるのにも、海へ押し出すためにも、檣製の道具を船の下に敷いて使った。寒中遅く帰った船を砂浜に揚げる掛け声、早朝、鶏の声とともに起き、霜や薄氷を踏みながら船を押し出す女衆、子供、老人たちの姿があり、これが昭和三十年代の漁港の日常の光景であった。

伊能忠敬銅像の除幕式に出席して

内山 いつ

推歩(すいほ)先生!あまりに熱心に天体観測に励んだことから、そう呼ばれていた忠敬翁、幾度なく見詰め、中象限儀で測った天空に旅立つてから、ちょうど二百年の歳月が流れました。

地球の大きさと形を知りたい、子午線一度の長さを知りたい。その思いが募り、隠居後の寛政十二年(1800)閏四月(新暦六月)、全国測量の第一歩を踏み出しました。五十五歳のときでした。以後十七年にわたり全国津々浦々を歩き尽くした距離は、実に四千万歩に及びました。この途方もない足跡が、やが

平成三十年度 役員 (敬称略)

- ・会長 内山 いつ (真亀) 再
- ・副会長 齋藤 功 (下貝塚) 再
- ・事務局長 村松 英一 (田中荒生) 再
- ・会計 古河 達也 (不動堂) 再
- ・書記 伊東 邦子 (東金掘上) 再
- ・監査 鈴木 千穂 (片貝) 再
- ・ 高橋 悦子 (真亀) 再
- ・ 清水 興 (片貝) 再
- ・ 山本眞之助 (作田) 再
- ・ 小澤 君代 (真亀) 再
- ・ 野嶋 壽子 (片貝) 再
- ・ 藤代 智子 (田中荒生) 再
- ・ 山口 勇子 (片貝) 再
- ・ 内山 菊敏 (真亀) 再
- ・ 桜井 宏樹 (真亀) 再
- ・ 谷川 良枝 (片貝) 再
- ・ 本保 弘文 (真亀) 再
- ・ 鎗田 貴俊 (藤下) 新
- ・ 河野 時巧 (小関) 新
- ・ 加藤 隆雄 (作田) 新
- ・ 木島 里八 (片貝) 再
- ・ 川島 秀臣 (西野) 再
- ・ 名誉顧問 再
- ・ 顧問 再
- ・ 退任 染谷 佳子 (作田)

て功績となつて開花・結実しました。比類のない正確さと芸術性を備えた『伊能図』、即ち『大日本沿海輿地全図』です。そして、深い郷土愛と使命感を持つて、郷土のために



土のため、郷土のために、困窮した際私財を投げ打つて人々を救いました。これに、伊能家は、代々伝わる家訓があり、困っている人たちのために尽くせ、という教えを忠敬翁は忠実に守つたのです。

さらに、九十九里浜の海岸近くで育つた忠敬は、幼少期に満天の星空を眺めながら、天体に対する興味を抱いたのではないでしょう。佐原の伊能家の養子となり、ずっと商人として生きてきた前半生でしたが、後半生まで、夢をあきらめない抜群の根気があつたと思えます。

天を測り、地を量る。その功績を讃える「伊能忠敬翁没後二百年記念行事」に参加する機会を得、生誕の地として誇りと喜びを味わつた一時でした。

当日(五月二十日)には佐原駅前ロタリにて銅像除幕式、その後、文化会館にて記念式典、シンポジウムが行われ、伊能家の子孫、シーボルトの子孫、間宮林蔵の子孫の方々のメッセージは、二百年の時を越えて、江戸時代にタイムスリップさせて頂きました。(五月例会「伊能忠敬と子孫の話」及び五月二十日に佐原で開催された「伊能忠敬翁没後二百年記念行事に参加して」)

事務局日誌

- ・ 4月14日(土) 平成三十年度総会
- ・ 4月27日(金) 特別講演会講師との打ち合わせ(古山先生・会長・古河・本保・内山菊)
- ・ 5月1日(火) 町へ特別講演会後援申請
- ・ 5月3日(金) 特別講演会のチラシを中村印刷へ発注(会長、本保)
- ・ 5月7日(月) 特別講演会のチラシ搬入
- ・ 5月15日(火) 五月例会の資料印刷
- ・ 5月19日(土) 五月例会
- ・ 5月20日(日) から、関係機関へ特別講演会のチラシを配布
- ・ 5月31日(水) 特別講演会のチラシを報道機関へ配布
- ・ 6月1日(金) 『郷土研通信』校正
- ・ 6月3日(日) 『郷土研通信』印刷所入稿
- ・ 小川良三氏より贈呈
 - ・ 高村光太郎・智恵子の写真(2点)
 - ・ 高村智恵子の学生時代の写真(1点)
 - ・ 長沼家一族の写真(1点)

あとがき

最近の世の中は「付度(そんたく)」ばかりで、高級官僚も「国民全体の奉仕者」という就職当初の「宣誓」を忘れ、上の者への付度を。要するに上の者にまかれる!ということ。それも、見え見えの付度は見苦しいばかりであるが、これも出世のためなのか? 実力よりも付度上手が地位を高くしているかの様。こんな世の中に誰がしたのか? 早くおさばらせないと物が言えない国家が始まる。歴史は語る。「そうなるから云々しても遅すぎなのだ!」と。

さて、本会は、七月に「特別講演会」を予定。町や教育委員会からのご支援を受け、公民館ホールをお借りしての開催。豊海に米軍基地があつた時代の「負の影響」を知り、後世にも伝えたいという願いを込めての開催。ご近所お誘いの上、公民館へ。(本)